

氏名 中村 哲 (なかむら てつ)

最終学歴 広島大学大学院教育学研究科博士課程教科教育学
(社会科教育) 専攻退学

学位 博士(学術)(東京工業大学)
論文題目: 「知識獲得過程の視点に基づく社会事象に
関する授業の分析」



絵: 橋本侑美 (2014年度卒)

主な職歴

- 1975年4月 秋田大学教育学部助手
- 1977年4月 秋田大学教育学部講師
- 1980年10月 秋田大学教育学部助教授
- 1985年4月 兵庫教育大学学校教育学部助教授
- 1995年1月 兵庫教育大学学校教育学部教授
- 1996年4月 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程教授
- 2005年1月 兵庫教育大学学長特別補佐 (2008年3月まで)
- 2012年4月 関西学院大学教育学部・大学院教授 (2017年3月まで)
- 2014年4月 関西学院大学グローバル日本文化教育研究センター長 (2017年3月まで)

その他

- 1998年4月 NHK 番組委員 (NHK 教育テレビ 2004年4月まで)
- 2002年4月 社会系教科教育学会会長 (2011年3月まで)
- 2005年4月 東京都教育委員会「日本の伝統・文化理解教育推進会議」委員 (2007年7月まで)
- 2005年5月 兵庫県教育委員会「日本の文化」構想委員会委員長 (2007年3月まで)
- 2006年4月 文部科学省学習指導要領の改善協力者 (2008年6月まで)
- 2008年6月 科学研究費委員会専門委員 (2010年3月まで)
- 2013年3月 文部科学省「道徳教育の充実に関する懇談会」委員 (2013年12月まで)
- 2013年4月 和文化教育学会理事長 (現在に至る)

専門分野 教科教育学 (社会科教育) 教育方法学

主な著書・論文等

- 1 『社会科授業実践の規則性に関する研究—授業実践からの教育改革—』 清水書院 (単著) 1991年
- 2 『社会科授業に関する体系枠の構築と事例研究』 風間書房 (単著) 1996年
- 3 『「和文化の風」を学校に一心技体の場づくり』 明治図書 (編著) 2003年
- 4 『グローバル教育としての社会科カリキュラムと授業構成』 風間書房 (編著) 2004年
- 5 『和文化—日本の伝統を体感する QA 事典』 明治図書 (編著) 2004年
- 6 『学校を活性化する伝統・文化の教育』 学事出版 (編著) 2009年
- 7 『伝統や文化に関する教育の充実』 教育開発研究所 (編著) 2010年
- 8 『伝統と文化に関する教育課程と授業実践』 風間書房 (編著) 2013年
- 9 「東広島市における和文化教育の経緯と意義」 (単著) 和文化教育学会『和文化教育研究紀要』 第9号 2015年
- 10 『文化を基軸とする社会系教育の構築』 風間書房 (編著) 2017年

アイデンティティー関与の微弱な教育学部と強烈な関西学院大学の狭間

中 村 哲

私が関西学院大学教育学部に勤務することになったのは、2012年4月である。2009年4月に教育学部が開設されたのであるが、臨床教育学科の教員免許取得の関係から「公民科教育法」等の教職科目担当の教員が必要とされた。当時の学部長芝田正夫先生から人事協力の打診があり、教育学部発足3年目に赴任することになった。今年度の3月に退職するので関西学院大学では、5年の在職期間になる。私の職歴としては秋田大学教育学部では10年、兵庫教育大学では27年、関西学院大学教育学部では5年の合計42年間、大学教員として勤務してきたことになる。

各大学での教育研究活動の関与はいろいろ指摘できるが、関西学院大学での教育研究活動に関する関与を端的に表現するならば、表題の「アイデンティティー関与の微弱な教育学部と強烈な関西学院大学の狭間」での勤務だったと言える。教育学部に赴任した時の私の感想がある報告書に次のように述べられている。「教育学部の現状をイメージ化すると、教育学部としての飛行物体が関学キャンパスから離陸した様子が浮かび上がる。しかし、その飛行物体が教育学部としてどのような種類でどの方向へ向かう飛行物体なのか明確でない。飛行物体の操縦に真剣に関与している教員もいるが、私のように飛行物体から垂れ下がっているロープを掛けられて釣り上げられている教員もいる。全員の教員が飛行物体に搭乗し、それぞれの役割をもって飛行物体の種類と方向を決めることが課題である。」

この感想は、現時点でも変わらない。その意味では、私にとって関西学院大学教育学部教員としてのアイデンティティー関与は微弱であった。その理由としては、次のことが指摘できる。教育学部が聖和大学との合併で創設されたので、学部としての歴史が浅いこと。大学において教育学部の役割と意義が認知されていないこと。教育学部のカリキュラムが現実対応で変更され、関西学院大学の教育学部としての展望に基づいた特色あるカリキュラムになっていないこと。教育学部の運営が、教育研究の専門性に基づく教員によって構成される組織として機能していないこと。

アイデンティティー関与が微弱な教育学部とは反対に関西学院大学には、これまでの大学勤務においてもっとも強烈であった。私の最近の研究関心は、

次のような教育動向と課題にある。戦後日本の教育方針を定めていた教育基本法が、2006年12月に改正され、「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成」の教育目標が意図された。そして、日本の学校教育において「伝統と文化」に関する教育の具体化が切実な課題となっている。このような教育動向において、「伝統と文化」を基盤とする日本人の育成という自国のアイデンティティー形成が強化されると偏狭な自国中心主義の教育に陥る。しかし、自国のアイデンティティー形成なしに国際社会への関与を図る教育は難しい。このジレンマの対応が、「伝統と文化」に関する教育の課題である。この課題に対して、日本の伝統行事である「鯉のぼり」活動をグローバル文化シンボルとして意義づけて研究を推進している。

この研究を推進する為には研究費の確保が必要になる。一般的には科学研究費助成が主になるが、関学では大学共同研究としての助成制度がある。幸運にも科学研究費助成だけでなく、赴任翌年から継続的に大学共同研究の助成を受けることができた。そして、このような自主的研究を大学組織として一層推進することを意図して「特定プロジェクト研究センター」制度が設けられている。この制度を踏まえて2014年度から「関西学院グローバル日本文化教育センター」を設置し、学際的・革新的に研究を進めるようになった。さらに、このような研究成果を教育として還元するために全学部生が受講できる共通教育センターの「総合コース」科目として「グローバル世界における日本の文化力」を実施してきたのである。

このように大学全体へのアイデンティティー関与としては、共同研究費の確保から研究推進組織のセンター設置、さらに研究成果の還元としての共通教育センター「総合コース」の教育実践として結実する教育研究を強烈に推進できた。5年間の在職期間でこのような関与が実現できたのは、創立125周年を超える歴史の中で育まれてきた教育研究活動の主体性と寛容性を重視する大学運営とグローバル世界における教育研究機関との連携の賜である。今後、教育学部も長い歴史を経ながら所属する教職員と卒業生及び在學生も含めて教育学部へのアイデンティティー関与が強くなる組織になることを期待したい。